

匠たちに学べ!

～起業を目指して!七転び八起き～

第7回
株式会社
ステップテクノカ
麦谷 富浩



写真1 展示会で使うベストの試着でご機嫌な麦谷氏

私が独立したのは22歳のころ。最初はひと仕事いくらの受託の仕事をもっていました。マイコンや電子技術は、電子系の学校で学んだのではなく、すべて独学です。23歳でステップテクノカの看板を上げた後、24歳で株式会社へ登記し、受託開発を黙々とこなす日々でした。28歳ごろから受託開発ではなく、自社製品を売るメーカーへの転身を図り、現在の独立系ファブレス・メーカーに至ります。

技術屋は商売が下手なので、途中から経営を信頼できる人に社長業を代わってもらい、技術部長の立場で新製品開発に専念させてもらいました。50歳を迎えるに至りましたが、製品のあり方や、開発現場の風などの全般において、まだ誰も作っていない物、世の中に無い物を目指す心意気は、今も色あせていないと自負しています。

独立や起業は「知らぬが仏」勢いで!

● お金や技術はなくても意気込みで!

起業を目指す多くの方は「独立資金が溜まったら、この技術を身に付けたら、こんな物が作れたら、独立できる」と思われているのではないのでしょうか。

私の実際は全くこの逆です。株式会社設立時は300万円が最低資本金でしたので、友人知人から1口10万円で30人からお金を借りての登記でした。また、フリーランサ(ひと仕事いくらの契約)で仕事ももらっていた私は、「もらえた仕事は必ずこなす」という意気込みだけしかなく、必要な技術や知識の多くは、仕事に着手するかしないかの段階で独学的に猛烈にねじ込んでいたのが実態です。

もちろん、自分独自の特殊な技や専門知識を持ち合わせていませんでしたし、畑違いの専門学校中退の私にはコネも全くありませんでした。

では「どうして独立したのか?」と問われますと、自分にはサラリーマンは勤まらないと思えたからです。また、決して裕福な育ちではなかったせいか、早く人一倍稼いだかったからでもあります。

このころ、24歳。若さというのは、恐ろしいほどの武器です。「知らぬが仏」という日本の諺通り、独立に対して恐怖心を持たなかったからこそできた無謀な行動だったと思います。

● お行儀よく独立などできない

しかし、その後に出会った多くの社長さんたちから独立時の話を聞いても、「～たら、～れば」の延長でお行儀良く独立された方はほとんどいませんから、起

業や独立には、ノウハウ本に書かれているような「たられ時期」ではなく、それぞれの個人に個有の勢いつくタイミングというものがあるのだと思います。

第二の起業 メーカーへの転身

● このままでは死んでしまう...

次に私が目指したのはメーカーになることです。起業はしたものの、朝7時から夜中の2時が定時、もちろん土日は休みなしといった状況で、いつも納期に追われながら受託の仕事をしていました。

「このような状況は若くて体力のあるうちしかできない。やり過ぎると死んでしまう。何か売れる商品を持たなければ。」という危機感からでした。とはいえ、何を商品にしたら良いかも分からない中、自分が今こなしている仕事が楽になる物はないかと考えました。

● 受託開発をやめて自社製品を売るメーカーになろう!

当時、複数のマイコンを用いて一つのシステムを構築する場合、UARTを口や耳代わりにしてメッセージを交換する、RS-232-C/RS-422/RS-485などのインターフェースを使うのが一般的でした。しかしこれらの「マイコン間通信」は、イレギュラ処理やタイミング制御、手順の制御などの手間が多く複雑で、多くの労力が必要でした。

そこで、「理想形とはなんだろう?」と自問自答した結果がメモリとメモリの直結です。「マイコン間通信」の付帯処理などを一切行わず、自分のメモリにデータを書くと遠く離れた別のマイコンのメモリにそのデータがコピーされている、つまりはデュアル・ポートRAMの長距離版のような物です。

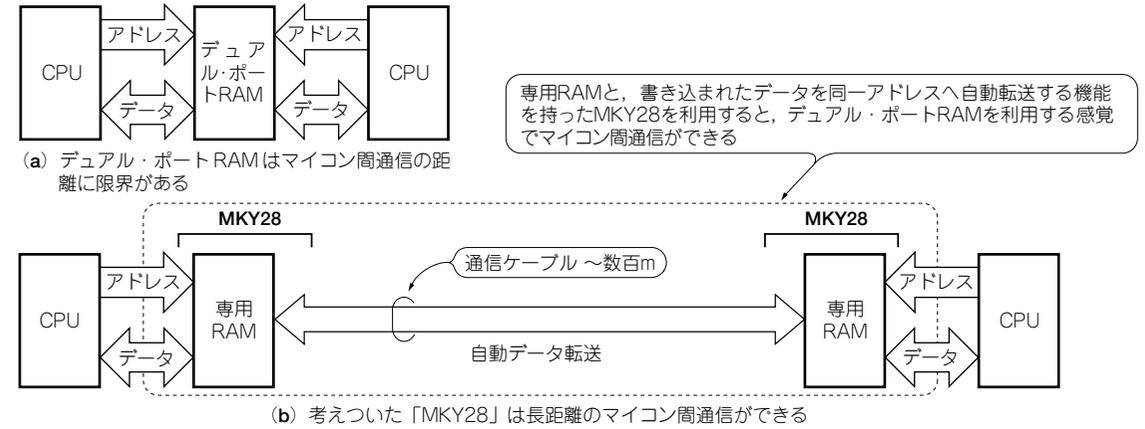


図1 メモリを介してマイコン間で通信する方法

そしてMKY28と命名した商品ができました(図1参照)。

● 受託とメーカー、業務は似ていても思考は真反対

商品が完成しても、商品の売り方を知らない私たちは大変なことになりました。今にして思えばごく当たり前ののですが、産業機器業界では、新規採用が決定した部品が量産品に搭載されるのは2~3年後です。この間は結構な忍耐を強いられました。

メーカーへの転身に向けては、受託開発をやめ、業務は定時に限定して残業は廃止。実務は回路設計やプログラム作りといった点で起業当初の受託開発仕事と酷似していても、思想的には180度異なる転換となりました。180度異なるとは例えば、納期がない、要求仕様も示されない中で自分たちで考察するという具合です。これは仕事へ向う姿勢や思考が「Only You」から「How Many」への大転換でした。

● 社長を代わってもらって開発に専念し軌道に乗った
純粋に技術バカで商売が下手な私を見ていた独立前から懇親のあった商社(バイオニクス)の社長に、当社の経営面を見ていただけることになりました。そして、会社をグループ化し、私は技術部長の立場で製品開発に専念させてもらいました。

「石の上にも3年」「継続は力なり」とはよく言ったもので、3年を過ぎたころから少しずつメーカーらしくなり、「こういう物が創れるなら、こんな物はできないの?」といった、ユーザーの声もいただけるようになってきました。

そんな中、メモリ内のデータ・ビットを、そのまま遠隔のI/Oポートと見なせる、1対N(複数)のリアルタイム信号伝送のシステム“Hi-speed Link System(略称HLS)”を開発し、これがホームラン級の大ヒットとなりました。次ぐCUnet(写真2)は、N対Nの共有メモリで今も大ヒット中です。



写真2 LSI「MKY43」 複数のCPUから複数のメモリをまるで一つのメモリかのようにアクセスできる

これからの方々へ...

● 私の経験が若者の時代にそのまま通用するとは思えない

私なりのノウハウを明かすとすれば、ありきたりですが、「商品に魂を込める(MKY28, HLSは開発に2年, CUnetは5年かかっている)」「自分が欲しいと思える商品を創る」「誰も作っていない物を創る」といったところからです。

私の経験談がこれからの若者の時代に、そのまま通用するとは思えません。なぜなら、まだ物のない時代の昔話だからです。

● 個性をフルに活かしてみてください

今の時代は物も情報も溢れ、創造よりも選択で暮らす時代です。しかし、これからの時代でも通用するであろうと思えることがあります。それは「皆と同じ考え方をしない」ということです。

人は、価値観や考え方、物の見方が皆と同じでない不安になります。これは群集心理そのものです。「皆と同じ」は、時に真実を見失うことがあります。

あなたが自信を持っている事柄が、皆から「それは常識外れでオカシイ」と言われるのであれば、それが社会に役立つこと(物)であることを立証してみたいかがでしょうか。それが個性や独自性を育むと私は思います。